時流を読む

「あるもんで」精神で地域起し

農的社会デザイン研究所 代表 蔦谷 栄一

この村を守りたい

今ほど「鎌鼬（かまいたち）通信」のNo.5が届いた。発行はNPO法人鎌鼬の会で、秋田県羽後町に事務局はある。

羽後町は秋田県の南部、山形県境近くにあり、湯沢市、横手市、由利本荘市と隣接し、出羽丘陵内陸部の要所として発展してきた。この羽後町の平地は横手盆地に属し、豊かな穀倉地帯を形成しているが、町の面積の3分の2は出羽丘陵に属する山地で占められている。その町の中心部から西に走って七曲峠を上がると田代という集落に出る。丘陵地にある田代は水田が広がり、茅葺き民家やはさがけも含めた田園風景は息をのむほどに美しい。

その田代はご多分に漏れず過疎化が著しいが、この田代の集落と景観を残すとともに元気な村にしたい、として町会議員をもつとめる阿部久夫さんをはじめとする地元の人たちが、様々の活動を試行し積み上げてきた。その一つが鎌鼬美術館の設立である。

舞踏家・土方巽との縁を活かす

ダンス・舞踏によって戦後の前衛芸術運動の先頭に立ったのが秋田県出身の土方巽である。その土方は田んぼや野良で仕事をし、談笑している田代の人々がいる中で、「村中を駆け、野良を跳ねた」。これを写真家の細江英公が撮影して「鎌鼬」なる写真集を発行して大きな反響を呼び起こした。

阿部さんたちがまち起しの起爆剤として着目したのが、細江による写真と土方の舞踏資料の展示であり、このための村中にある旧長谷山邸を利用した鎌鼬美術館の設立である。資金調達が困難な中、クラウドファンディング等も利用しながら、民間ベース、自力で2016年4月に設立にこぎつけた。

鎌鼬美術館の見学に国内だけでなく海外からも人が集まるようになってきた。さらにはここを拠点に毎年、舞踏、和の音楽、トーク・鼎談等による「鎌鼬の里芸術祭」が開催され、賑わいを増している。

農家キッチンあるもんで

このように鎌鼬美術館を核にして、活動が拡がるが、20年にオープンしたのが「農家キッチンあるもんで」である。阿部さんが経営する農家民宿「かやぶき山荘　格山」を利用した、地元のお母さんたちが手作りする料理を提供するレストランで、土日の昼だけ営業を行う。食事メニューは「季節のあるもんでランチ」一種類のみ、税込みで1100円。この9月上旬での献立はとうがんあんかけ、格山そば、花おくら・ミョウガ・モロヘイヤ・カボチャの天ぷら、シソ寒天、スイカのサイダー等々とボリュームも満点。お茶はクロモジ・ドクダミ・イチジクの薬草茶も出される。メニューは季節ごとに中身が変わる。40食が用意され、予約をしないとなかなか昼食にありつけないそうで、大好評。

「あるもんで」は「あるもの」を出すの意味だ。足元にあるものを活かし資源にしていく。田代の取り組みの中心には「あるもんで」の精神がどっしりと座っている。